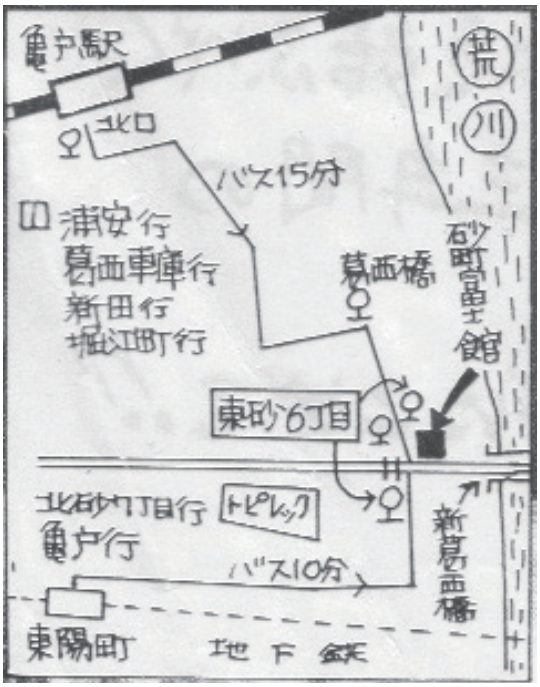
音の旅人

演劇と音響と劇場と(12)

市来 邦比古

1976年８月末には第七病棟の上演場所が決まった。江東区砂町の葛西橋のたもとにあった砂町富士館という映画館である。６月、７月、８月と３か月にわたって手分けして都内あらゆるところを回って、上演できそうな場所を探しまわった。そこで上がってきたのが北区十条の映画館、大崎の工場跡、吉祥寺の倉庫そして砂町富士館である。十条は上映していたが富士館は廃館していた。少し前に江連卓の幻想劇場がここで上演していたのを観に行ったことがあった。東西線の南砂町の駅から歩いて30分弱、東陽町からバス(本数が少ない)で10分、総武線の亀戸からバスで15分強という普段新宿、渋谷をテリトリーとしている私たちからすると陸の孤島のようなところだ。現代人劇場が新宿文化で上演していたことを考えると映画館上演という親近感があった。10月から12月いっぱいの３ヶ月借りることができ、自由にしていいとのことだ。十条は便利だが制約も多い。陸の孤島だからこそ私たちの旗揚げにはふさわしいのではないかとの結論になり12月上演の日程も決めた。12月10日初日で25日までの16日間である。10月24日をスタッフ・キャストの顔合わせとして準備を進めることとなった。

８月は第七病棟に大きく時間を割きながら



砂町富士館の地図:第七病棟チラシより

も、引っ越しという大きなイベントを終えた。空間演技が**岡部耕大**の青俳に書き下ろした『さすらいよあれがぼくの風だ』と処女作『トンテントン』の２作を経堂の太陽神館という舞踏集団が持っていた同名のスペースで上演することになった。この公演から藤居俊夫が主軸となって空間演技の音響を担うことになる。上演機材を提供し、『さすらいよ・・・』の上演音素材を提供した。８月にはあと田村節子のジァンジァンでの公演もあった。

8月末には学校の夏休みを使って**木俣貞雄**の東京ミュージカルアンサンブルの試演が世田谷区(たぶん？)の小学校で行われた。本番使用の装置を建て込み、照明、音響も本番同様の仕込みをしてゲネプロを行ったのだ。上演は11月に入ってからだがそれまでにリハーサルを重ねてからという予定だった。

9月に入ると現代舞踊協会の都市センターホールでの新人公演の2日間が4日間となり、山本直のもとでオペレーターを務めた。このタイプの仕事は劇場に入ってからのリハーサルで初めて作品に出会って、音出しをするのだが、袖や花道での音出しでも舞台を見ることを重ねると作品やダンサーの善し悪しがみえてくるのであった。

自由劇場の10月公演『幻の水族館』を頼まれていた。9月に入ってからリハーサルをしているところに参加して、打合せをして、オリジナル音楽のダビング、効果音の作成、本番テープの作成、本番用機材で自由劇場にないものを調達、搬入仕込みして劇団のオペレーターに渡すのである。その『幻の水族館』は5月『どしゃぶり皇帝』公演以来の作品である。六本木自由劇場での上演である。串田和美作品で欠かせない俳優真名古敬二が沢弘泰として参加している。スタッフは作・演出：串田和美、音楽：越部信義、振付：中野啓介、美術：倉本政典、照明：富松博幸、音響：市来邦比古、舞台監督：網倉直樹、宣伝美術：イエローバッグ、制作:山田寛・早野ミナ。キャストは吉田日出子、笹野高史、家高勝、大森博、沢弘泰(真名古敬二)、関下祥子、早川節子、建部香代子、有福正志、城戸光子、楠原賀代、三浦容子ほかである。音響のオペレーターは杉本満だがクレジットはされていない。劇団には第七病棟の劇団員になることを宣言して12月作品から私は手伝う事ができなくなるので、その時から杉本満がプランナーで進めてくれるよう伝えた。

『幻の水族館』チラシ

オンシアター自由劇場の11月公演『お化粧銀次・紅葉鳥恋浮橋』は串田和美が俳優名を藤川延也と名づけた襲名披露興行として行われた。スタッフは作・演出：家高勝、音楽：岡林信康、振付：観世栄夫、美術：浜名樹義、照明：富松博幸、殺陣：国井正弘、音響協力：市来邦比古、舞台監督：網倉直樹、舞台監督助手：杉本満、宣伝美術：イエローバッグ、制作：山田寛・早野ミナである。この公演から私は音響協力となり実質離れた。作演出の家高勝とは、翌1977年9月に演劇集団円による芝のABC会館ホールの柿落し興行での橋爪功主演の『天竺徳兵衛』で乞われて共同作業を行ったように親密になった。

キャストは藤川延也(串田和美)、吉田日出子、佐古正人、笹野高史、国井正広、平野稔、中原潤、北見敏之、大森博、真名古敬二、関下祥子、椎野裕子、早川節子、知浦伸司、有福正志、藤田修、城戸光子ほかである。

『お化粧銀次・紅葉鳥恋浮橋』チラシ

オンシアター自由劇場とは12月公演まで音響協力として名は出ているが、16日

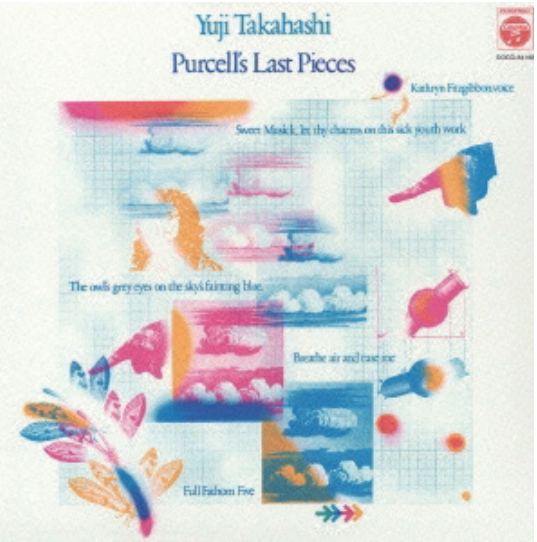
初日なので第七病棟が10日初日で幕開けてからの作業は多くはできなかったとおもわれる。

10月24日は第七病棟公演『ハーメルンの鼠』の稽古開始、顔合わせ日であるが浦和市民ホールでの第３回ステージワン公演の本番に就いている。山本直がプランナーで私はオペレーターとして就いていた。藤井公、藤井利子による作品や江原朋子、志賀美也子、松崎すみ子、間仁田美那子らの作品など第一線の振付家による作品が並んでいた。

11月２日には檜健次門下による創作舞踊集団公演『巨大なる０』が日比谷公会堂で上演された。この公演は藤居俊夫に作業のほとんどを任せていた。監修檜健次、演出・出演は田村節子、出演に倉持千鶴子、葉桐次裕、岡寿子、吉岡陽子、小沢秀江、桐山良子ほかでこのころ最も親密だった舞踊家たちであった。

11月９日に千石にあった劇団昴の持ち小屋三百人劇場で現代舞踊の石井かほるによるダンス・パフォーマンス ‘76（三百人劇場）『ひとりのための３つの話』が行われた。石井かほるは亜人の会での振付や出演で知己を得た村上クラーラを介して紹介された現代舞踊＝モダンダンスの第一人者である。日本におけるモダンダンスの祖の一人である石井漠の最後の弟子といわれた舞踊家である。作･振付･出演：石井かほる、音楽：高橋悠治、出演：坂本信子、野坂公夫、神雄二、村上クラーラ、木佐貫邦子ほかである。木佐貫邦子はこの公演の後在外研修生として海外にわたり、帰国後ソロ活動を行い、注目を浴びた。コンテンポラリーダンスへの移行を体現した一人である。

『ひとりのための３つの話』に使用した音楽は高橋悠治によるレコード作品「パーセル最後の曲集」からシーンに合わせて組み合わせていった。ヘンリー・パーセルは、イギリスのバロック時代の作曲家。その作品にインスピレーションを受けて様々な角度から構成した作品である。一人の音楽家の作品に向き合ったのも初めてだし、現代音楽作品にじっくり親しむのも初めてだったかもしれない。石井かほるの柔らかな感触の作品創りに出会えたのも大きな成果だった。



「パーセル最後の曲集」ジャケット

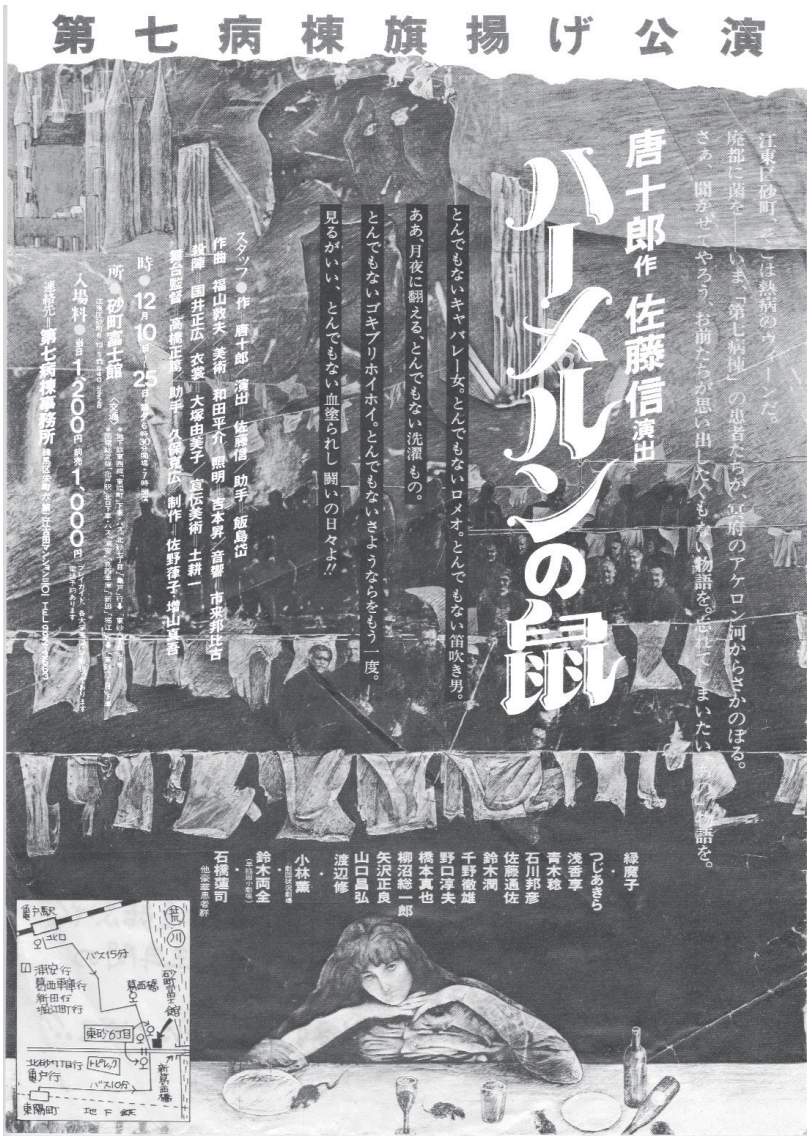
11月13日、14日には千葉県舞踊協会の合同公演を頼まれていた。稽古下見に10月31日、11月７日、９日を充てるということで私が立ち会うのが難しい日があるため藤居俊夫、藤村民雄に手伝ってもらいながらこなした。

11月24日には東京ミュージカルアンサンブルの『石になったかりうど』の小学校公演の初演が行われた。この公演はデモンストレーションであり、翌年春から東京都内、近郊を巡演することになっていた。

上記の10月、11月の仕事と並行して第七病棟の稽古が始まり、劇団の一員としての私が始まった。

第七病棟旗揚げ公演、唐十郎作、佐藤信演出『ハーメルンの鼠』である。スタッフは作：唐十郎、演出：佐藤信、演出助手：飯島岱、作曲：福山敦夫、美術：和田平介、照明：吉本昇、音響：市来邦比古、殺陣：国井正弘、衣裳：大塚由美子、宣伝美術：土耕一、舞台監督：高橋正篤、助手：久保克広、制作：佐野葎子・増山真吾である。和田平介はこの作品以後2000年の『雨の塔』まですべての作品の美術を担った。この稿ではチラシを挙げるにとどめ詳細は次稿へ持ち越す。

劇団第七病棟の稽古と公演、そしてどっぷり漬かっていった舞踊関係の仕事、加えて東京ミュージカルアンサンブルの巡演と大きな３本立ての仕事が明確になった1976年の年末である。（つづく）



『ハーメルンの鼠』のチラシ